巻 頭 言

奈良女子大学理学部数物科学科
嶽村　智子

2024 年 7 月から 2026 年 6 月まで，日本数学会 男女共同参画社会推進委員会 委員長を拝命しておりました. 2022 年初めにその当時委員長であった大山口菜都美氏と前委員長である坂内健一氏からお声がけいただき，最初は web 担当として委員会に加わりました．みなさまは，日本数学会の「男女共同参画社会推進への取り組み」のページをご覧いただいたことがあるでしょうか．私自身，委員になる前は，女性だれでも懇談会や学会の際の保育室利用のためにページを訪れたことがある程度でした．本委員会では，「女子中高生夏の学校」「女性だれでも懇談会」「数学者の，研究と子育て懇談会」「男女共同参画学協会連絡会との連携」をはじめ，May 12 （女性数学者の日），教育委員会主催の教育シンポジウムを共催で開催するなど，男女共同参画に関わる活動を積極的に行っています．web 担当をしていた際に，委員会の活動の様子をよりわかりやすく開かれた委員会とすることを目指し，共に web 担当であった横山俊一氏と現ページの仕様に改訂いたしました．本ページには，2002 年 7 月の本委員会の前身である WG 委員会の設立から本委員会の設立に至るまでの経緯が詳しく記載されておりますので，本委員会の成り立ちや経緯にご興味がある方は，是非ご覧ください．

私が本委員会と接点を持ちましたのは，2014 年に第一子を妊娠していたときです．その当時，同時期にライフイベントを迎えていた佐々田槙子氏と共に，学会で女性数学者が交流できる場の開催を小磯深幸先生を通じて本委員会に提案し，広島大学で開催された 2014 年度秋季総合分科会にて開催が叶い，本委員のみなさまのご尽力により，現在まで懇談会を定期的に開催することができております(詳細は，[1])．現在では，「数学者の，研究と子育て懇談会」を開催するに至り，ライフイベントに関する情報共有が行える場が増えてきております．

男女共同参画社会推進委員会の活動は，女性研究者支援であると思われることが多々ありますが，女性研究者の支援を行っているわけではなく，委員会の名の通り，性別に関係なく共同参画社会を推進することを目的としています．学会での保育室につきましては, 2023 年秋季総合分科会以降, 男性会員の利用が過半数を占めております(詳細は，「令和 7 年度 日本数学会 男女共同参画社会推進に向けた状況調査アンケート」結果報告ページにございます.)．委員の構成も男女半々，委員長も男性と女性が交互に務めております．委員会の場では，ダイバーシティ&インクルージョンに関して情報共有や意

見交換も行っております.

今年度 日本数学会は，男女共同参画学協会連絡会の役員選出学会となり，委員長として坂内健一氏，副委員長として西晴子氏と嶽村が理事を仰せつかっております．男女共同参画学協会連絡会は，STEM 分野と称される科学・技術・工学・数学分野における 100 以上の学協会から構成され，男女共同参画の実現のために活動しています．10 月 10 日に開催されるシンポジウムに向けて，平田典子先生をはじめ，委員が一丸となり準備を進めています．この文章が公開される頃には無事に会が終わっていることでしょう．今年度は，「ひとりひとりが活躍できる，教育研究環境の構築」をテーマに，東京都の教育長として都立高校入試の男女別定員の廃止を実現された浜佳葉子氏と，京都大学の学生総合支援機構で，長年ハラスメント等の問題に向き合ってこられた杉原保史氏をお招きいたします．それぞれの視点からお話を伺うとともに，多様な立場のパネリストを交えた議論を行います. 男女共同参画学協会連絡会のページで報告書を公開いたしますので，是非ご覧いただけましたら幸いです.

ここまで長々と本委員会における活動の紹介を中心に書いてきましたが，日本数学会における本委員会について一人でも多くの方に知っていただきたく，また多くの方に参画いただき，日本数学会，ひいては，日本における数学分野の研究環境が更に整い，発展につながることを切に願っております．委員会活動を通して，多くの方々に出会い，様々な議論をさせていただいたことが，大変貴重な機会になりました．学ぶことが多く一言でまとめることはできませんが，次の言葉をここに記すことにいたします.

「様々な要因で研究を続けることに困難を感じる状況があること，個人の属性はその人の一側面にすぎず，その側面だけでその人を判断することはできないこと，個人が相手を慮ることができる範囲には限りがあること，これらを踏まえて，私たちはできる限りのことを一歩一歩，答えがない道を進んでいることを自覚することしかできない.」

数学会会員や数学を学ぼうと志す学生が置かれている研究環境は，大学の規模や立地，研究室の財政状況によって異なり，また，何を困難だと感じるかにも個人差があります．だからこそ，自分が困難だと感じていることを言葉にし，必要であれば周囲に助けを求めることから始めてほしいと思います．同時に，他者が置かれている状況や抱える困難にも目を向け，それぞれの違いを認めながら，できることを一歩ずつ進めていくことが誰もが自分らしく力を発揮できる社会につながっていくのではないでしょうか.

[1] 佐々田槙子，嶽村智子，女性数学者交流会「女性だれでも懇談会」の紹介，『数学通信』第 26 巻第 4 号，42-48